

小さい頃は、大きな声で返事をできるだけで褒められていた。

中学生のときには同級生のノブくんに告白されて、それからずっと長く付き合ってた。

大人と呼べる年齢になってからは、就活は大変だったけれど、どうにか大企業の営業部に内定をもらうことができた。

派手さはないけれど、順風満帆な人生のつもりだった。

これから先、適齢期ってヤツになったらノブちゃんと結婚して、幸せに暮らしていくんだ——って。

ずっと、そう思っていたのに。

「おら、会議室行くぞ三浦。さっさと机片付けろ」

浮気されて、別れて、成績は落ちて、苦手な怖い先輩と組まされて。私の人生、今日この時が間違いなく、今までで一番最悪だ。



ろこもこうさぎ

絢辻 透

「ままま、まだ資料がまとまってなくて……っ」

「いつまでやってんだよ。立て、行くぞ」

「あと五分だけ……ひやつ!? え嘘、なんで持ち上がるんですかつ、だ、誰かー! 男の人おー!」

スーツの後ろ襟を掴まれヒョイと持ち上げられて、じたばたと暴れる。私を持ち上げる逞しい二の腕はびくともしない。

それもそのはずだ、私と先輩の身長差はざつと40cmほど。軽々と持ち上げられた私はさながら獅子に仕留められた小動物のようだろう。

悲痛なる叫びを聞いた部長は、持ち上げられる私を見て笑い皺を作りながら「うちの会社に赤城に勝てる男はいないなあ」と言うだけだった。

「で、まず成績が落ちた理由は？」

個人面談用の狭い会議室で、向かい側にどっかり座った188cmの巨軀に思わず縮こまる。

私を睨むように見つめている巨軀、こと赤城 宏嵩(あかぎ ひろたか)先

輩は、大手企業営業部の若手トップのエース社員だ。

元野球部主将の肩書きにふさわしい社内随一の逞しく筋肉質な身体。営業中はいざ知らず、社内では傲慢で不遜、齒に衣を着せぬ態度——しかし顔の良さと成績で全てを許されている、そういう人である。

「絶対怒られるんで言いません……」

「言うまで部屋から出さねえけど？」

ガツンと圧を出されてしまった。怖い。

といつても仕方ないといえれば仕方ない。対する私、三浦 四葉（みうら よつは）は148cmの普通体型、営業成績はこの間まで中の下——現在は下の下という、真逆も真逆の人間だ。

赤城先輩は現在、そんな私をどうにかするための教育係として抜擢されてしまったのだから。

「ううっ、せめて笑わないで聞いて欲しいんですけど……」

「聞かねえとわかんねえよ。原因あんならとつとと言え」

怖い。怖すぎる。

私は赤城先輩が苦手だ。格好いいなとは思っているけれど、口は荒いし体格も成績も違いすぎるし、そもそも先輩は派手な女性社員にモテまくっているの
で近寄りがたい。

なのに赤城先輩は気にすることなく頻繁に私に話しかけてくるから余計
ドキドキするのだ。

（まあそれは私が、営業先から貰ったお菓子を与えられると喜んで食べるか
らなんだけど。……なんかもう、ほとんどエサやりみたいな感じだよ）

恐る恐る先輩の顔を覗き込む。

赤みの強い煉瓦色の髪から覗く目元はどこか不機嫌そうで、口元は硬く
引き結ばれていた。

そんな表情ですらいけてるファッション誌のモデルみたいに整ってる
なあと思うけれど、そんなことを考えている場合ではない。

どう見ても言わなければ許してもらえなさそうな雰囲気だ。

私は意を決して口を開いた。

「その、一ヶ月くらい前なんですけど……」

「おう。そんな時から成績ガタ落ちしてるもんな」

「ううつ……三浦、一ヶ月前……」

ずうん、と気分が沈む。

思い出すだけで塞ぎ込んでしまうし、言ったら絶対くだらねえって怒られるだろうし。

「……か、彼氏と別れたんですよお……っ！」
「——は、マジで？」

赤城先輩の、重たげに少し伏せられていた臉が持ち上がる。

少し掠れた声には怒りのトーンはなく、ただただ驚いたような表情で私を見ていた。

あれ？　なんか思ってた反応と違うな。怒られなくてよかったけれども。

「彼氏って、三浦がしょっちゅう話してた……ノブ？　とか言うやつだろ」
「はい……ノブくんとは中学生の時から付き合ってたんですけど……」
うう、私……ずつと、浮気されてみたいで……っ」

あの時のことを思い出すと胃がきりきりする。

長年付き合ううちに、ノブくんの対応が昔より雑になっていたのは感じていた。

信頼があるからだよね、と言い聞かせて過ごしていたある日、驚かせようと思ってノブくんの好きな新作ゲームを手に何も言わず家に行ったことがあった。

その時――

「ドア開けたら、ノブくんっ……めちやくちやバインボインな女の人とえっちしてたんですよ……!!」

「は……？　マジかよ」

「その時判明したんです……私、ずっとキープされて……二番目だった

んだ、って」

私ではなく、えっちしていた女の人に向かって慌てて「コイツはただの腐れ縁」「キープだった」と言い訳するノブくんを思い出すとじわじわ涙が出てくる。

鼻を吸ったら、眉根を寄せた赤城先輩が屈んで顔を覗き込んできた。

相変わらずの整った仏頂面だ。綺麗すぎて気が散るなあと思いながら止まらない口を動かす。

「でつでも、仕方ないんです……！ 私ノブくんとはほとんどそういうことできてなかったから、ずっと我慢させてたのかなって……なんか、私の身体、おかしいみたいで」
「おかしい？」

訝しげに首を傾げる赤城先輩にハツとして口を噤む。

——やばい、とんでもなく恥ずかしいコンプレックスまで暴露するところだった。

「あついえ、すみません、今のは忘れて下さい……っ！！」

「……ふーん。っーか、普通に考えて」

「ひいつ……ハイ……」

「そのノブとかいうヤツがおかしいだろ」

ぱちりと大きく瞬きをする。

まさか先輩から出てきた言葉とは思えなくて三秒ほど時が止まった。

それから一瞬にして視界がぼやける。滲んでいただけの涙がぶわりと溢れてきてしまった。

「うええんっせんぱい、嬉しい、優しい、救われました……！」

「泣くなよ、ほら、顔拭け。さっさと忘れろ、そんなクソ男」

先輩のものらしいハンカチを顔に押し付けられてしまった。

数度頬をぐしぐしと拭かれて、まるで犬にするみたいだなあと思いながら受け取って自分でも拭く。

小さなワニの刺繍が施されたハンカチからは、コロンかとワレだろうか——香水ほどは強くない、ふんわりと柔らかいウツディな匂いがした。

なんだかすごく安心する匂いだ。
苦手だと思っていたはずなのに。

「せんぱい……はい、忘れます！ 忘れて三浦、営業がんばります！」
「おう。じゃあ営業先、回るとこいくつか見繕ったから作戦会議な。これが資料」

ふつと息をついた先輩が自前のファイルから資料を取り出す。
どうやら私が用意するまでもなかったらしい。さすがの仕事ぶりだ。

（赤城先輩って……口は悪いけど、仕事はできるし、まっすぐ思ったこと言ってくれるから、信頼できるんだよね。一言二言なのに、なんかすごく励まされちゃったなあ）

一ヶ月間恥ずかしくて誰にも言えず、意気消沈していた心が持ち上がった

た。

いつまでも凹んでいないで、資料を用意してくれていたらしい赤城先輩に報いねばならない。

私は勇んで資料を開き、先輩と共に作戦会議に勤しんだ。



「うええんっ……惨敗だあ……」

「いくらなんでも噛みすぎだろお前……」

夜の会議室。

営業回りから戻った私は洗って返すと約束した先輩のハンカチでまた顔を拭っていた。

営業先で、先輩の指導通りに挨拶やセールスを言おうとして何度も噛みまくってしまい、ウケは取れたものの契約は一切取れず、見事な惨敗を喫し

たのだ。

目の前にいる赤城先輩は大きなため息をついている。

「『しえんじつはおしえわに〜』じゃねえんだよ。出だしから噛むなよ。なんでそうなるんだよ」

「だ、だって先輩が後ろにいると思うと緊張しちゃって……」

「へーえ、俺のせい？」

「ひい、嘘、嘘です……!」

一日中、先輩の圧を感じて噛み、先方に笑われてまた噛むというループを繰り返して舌がちぎれるかと思った。

笑ってくれた人が多いのがせめてもの救いだ。

たぶん赤城先輩が優しいような営業先を選んでくれたのだろう。

「つたく。明日リベンジするから早口言葉でも練習しとけ」

「ふあい、頑張ります……あ、あの」

ちらりと様子を窺うと、先輩は大きな身体を小さな背もたれに預けて目元を抑えていた。

疲れが滲んでいるようで、申し訳なさが募る。

「……本当にごめんなさい、先輩。せっかく用意してくれたのに、全然うまくできなくて。明日はもっと頑張るので……っ」

「頑張るの？」

「三浦のこと、見捨てないで下さい……！」

ぎゅつと目を閉じて言うのと、一瞬の間の後、はー……と大きなため息が聞こえてきた。

——やっぱり怒らせてしまっただろうか。

今日一日ひどい醜態を晒している自覚はあるし、この有様では赤城先輩でなくとも良い思いはしないだろう。どうしよう、やっぱり見捨てられちゃうかも……と思った瞬間。

「あー……もう、マジで、お前と二人だとイライラする……」

「えええ！？　うええんごめんなさいい、怒らないでえ……なんでもしますからあ……」

ぼそりと呟かれた言葉に驚いて目が潤む。

せつかく励ましてくれていたのに。せつかく苦手意識もなくなりそうだったところなのに。

先輩にすら見限られたらいよいよ私の人生おしまいだ——と肩を落としかけたところを、端正な顔が覗き込む。「オイ、」と少し低められた声が響いてなんだかドキリとする。

「今なんでもするつつつた？」
「はえ……？」

大きな身体を机に乗り出した赤城先輩の長い指先が、ハンカチを握りしめる私の手に軽く当たった。



s i d e .. 赤城

営業部での新入社員挨拶の時、一番ちっこい癖して一番でかい声を出してた女。

それが三浦だ。

（ビー玉みてえな目、してたな）

小さな身体を深く曲げてお辞儀してから顔を上げ、丸っこい瞳をキラキラさせて「よろしくお願いします!!」と言っていた三浦。

セールストークが苦手で成績は決して良くなかったものの、得意先からは可愛がられていた三浦。

何か食い物を与える度、小さいほっぺをパンパンにして食べていた三浦。そんな三浦のことが、俺はずっと好きだった。

（彼氏いるっつーから……クソが、早く別れろよって、思ってたけど。やつとだな）

三浦はちよくちよく件のクソ彼氏の話をしていたし、俺が話しかけると怒られると思っっているのかすぐ逃げてしまいう有様で、今までまともに迫れるチャンスがなかった。

（ま、唯一食い物やる時だけうれしそーにしてたから……色々寄越してたけど。ほぼ餌付けだったからな……）

突然成績が落ちた三浦の教育係の話が持ち上がって、これ幸いと名乗り出て。

教育中、少しでも隙があればと思っていたが、別れたとなれば話は早い。ようやくこれで大手を振って近付ける——そう思って踏み込んだ、が。

「せ、先輩……ホントに笑わないでくれるんですよね……？」

「当たり前だろうが」

まさか今日、ラブホで脱ぐ三浦を見られるとは思わなかった。

三浦は今、薄暗い部屋のベッドで俺の目の前、小さく正座をして頼りなくこちらを見ている。

気付かれないよう、ぐっと拳を握った。

（あー……まじで、可愛すぎて、ちんこイライラする……）

なんでもする、と言った三浦に俺が要求したのは「途中で切られた話の続き」だった。

昼は事情を聞く途中でなんでもないと言葉を切られたが、その先が分かれば、この先有利に三浦を口説けると思ったからだ。

しばらく言い淀んでいた三浦だったが、突然涙ぐみながら「笑いませんか?」と聞かれて。

突然真っ赤になったかと思えば――

「みつ、三浦……おっぱいが、その……なんか変なんです……!」

と、言ったのだ。

マジでどういう理由だよ。つーか聞いてよかったわ、他の奴にホイホイそんなこと話されてたらたまったもんじゃねえ。

変とかねえだろ、と言つても三浦は「初めてのエッチの時、ノブくんには変だつて笑われちゃって……」とか抜かすから脳がブチ切れてじゃあ俺に見せてみろよ、と呟いて。

それから数度の押し問答が繰り広げられたのち、煮え切らない三浦に「ここで引き返さねえとマジでラブホ連れてくぞ」と言い残して帰ろうとしたら——置いていかれた子供みたいな顔して後ろをついてこられ、結局ラブホまで来てしまったというわけだ。

「せ、先輩、これ、思ったより恥ずかしいんですけど……!?!」

「お前が見せるだけならつて言つたんだろうが」

恥ずかしそうにボタンに手をかけたままの三浦を前にぐるる、と喉が鳴

る。

とはいえ焦る必要はない。

自分で脱ぐと言ひ出したのもコイツだ。

俺は胡座をかいたまま、静かに待つことにした。

しばらく顔を真つ赤にさせて固まっていた三浦は、やがて覚悟を決めたように、ぷちりとボタンを外し始めた。

(手、ちつちえー……)

何をしていても、どんな表情も、どうしてこんなに可愛く見えるのだろうか。握ったら簡単にへし折れてしまいそうな細い手首を眺めていると、はらりとシャツがはだけていった。もたもたとキャミソールを脱ぎきる頃には、三浦はもう首元まで真つ赤だった。

小さな身体の割にはボリリュームのある胸元を晒したところで手が止まる。

「せ、せんばい、ほんとにわら」

「笑わねえ」

不安げに何度も確認してくる。それくらい笑われたのがトラウマなのだろう。クソ彼氏が。

答えたあとしばらく百面相していた三浦は、意を決したように膝を立てて俺に近付いた。

ぎゅつと目を瞑り「い、一瞬、一瞬で見てくださいね……！」とか言つて目の前に迫ってくる。

(……は?)

意味がわからん。なんだコイツは。

自分がどんだけ可愛いか自覚がなさすぎるだろ。

そもそも恥ずかしそうに脱ぐところからずっと可愛いし煽られてんだぞこっちは。

腹の底から煮立つような憤りをどうにか抑え込んでいるうちに、ぷちりと小さく音がしてホックが外れた。

かば、と外れたブラジャーの中からは――

「……………」

「ううっ……へ、変ですよね……っ？」

膝をついてなお届かない俺の目線を追うように、必死に胸を突き出した三浦の——たゆんと柔らかに揺れる胸の先は、花の蕾のように控えめに閉じられていた。

「………陥没乳首？」

「あ、そ、そういう名前なんですか……？　なんか普通のおっぱいと全然違って、ひえっ」

「変じゃねえだろ。すげーエロ……」

少し屈んで覗き込む。先っぽは完全に閉じた割れ目の中のようなだ。流石の三浦も少し焦ったのだろうか、身を引いてこちらを窺い見てきた。

「えっ、エロいんですか……!!？」

「エロい、興奮する」

「ほ、ほんとですか……うわあ……」

驚いたように目をまん丸にした三浦は、俺の言葉を噛みしめるように「興奮するんだ……」と、小さく呟いて。

そうしてまるで、花が咲くようにふわりと笑った。

——瞬間。

何かが、ブチリと切れた音が頭の中で響いた。

（あ。無理だわ、コレ）

「へへ、よかったあ……！ 嬉しいです、せんぱ……うひやつ？」

「お前さ」

「へっ」

「いい加減にしろよ」

彼氏がいたから。

会社だったから。
立場があるから。

そういう、今まで散々理性で堪えてきたものが溢れ出して、考えるより先に身体が動いた。

恥ずかしそうに胸元を覆おうとしていた細い両手首を掴んで、とさ、と押し倒す。

ベッドに沈む三浦は顔も首も、肩までも赤かった。



どうしよう。

また怒らせてしまったのだろうか——変じゃない、興奮するって言って貰えて嬉しかったのに。

そう思っている間に先輩の大きな手が私のおっぱいに触れて、ふにっ♡と柔く包まれてしまった。

「ひやう……っ!？」

「そんな悩み相談すんな、男に。それでラブホついてくんな」

「うえ!？　で、でも先輩が見せてみろってえ、んやっ……!!？♡」

低い声で囁かれながら胸の横をスリスリ♡　撫でられて擦ったさに身を振る。

恐る恐る覗き見た先輩の顔はぎゅっと眉が寄り目が据わっていて、明らかに怒った様子だ。それなのに撫でる指先は優しく背筋がぞくぞくしてしまう。

「俺以外にすんな。二度と」

「ふえっ？　な、なんで、んう……っ!？♡」

「こうなるからだろうが」

すり……♡　すり……♡　ときわどいところを撫でられて、柔く揉まれて、吐く息に熱がこもる。

逃げようと思っても先輩の大きすぎる身体に閉じ込められてしまつて、精々足をバタつかせるくらいのことしかできない。

（どうしよう、見せるだけつて言つたのに……触られちゃつて……っ♡ダメなのに——先輩が、ほ、ほんとに私で興奮してくれてるんだって思うと、なんか……ちよつと嬉しくて、つて、あつ？♡ やつ、乳輪……つままれちゃつて、恥ずかしい……っ♡）

「っふう♡ せ、先輩……それ、はずかしい、んうっ♡」

「つまむとピクピクするのエロ……なあ、触られても出ねえの、乳首」

「わつ、わかんないです、その……ノブくんは揉むだけで、」

「は？ ムカつく」

「へっ、なっなんで、あ、やだあ♡ ゆび、ゆびいれちゃだめ、うあ……っ！？♡」

戸惑っているうちにつぶん♡ と乳輪の割れ目に指を入れられてしまつた。

今まで感じたことのない感覚に背筋が勝手に反っていく。恥ずかしいし
擦りたいし、先輩はずっと怒っていて怖いくらいなのに。

長い前髪から覗く色素の薄い瞳がひどく熱っぽくて、視線が合うたび動
けなくなる。

「中でコリコリンなってきた、すげーエロ……」

「っ♡ ひっ♡ し、しえんぱ、それ、へん……っふあ♡」

「こうやって乳輪広げられて、指で捏ねられんの、変？」

「あうっ♡ あっ♡ へん、なんか、おなか♡ ぞくぞくして、あつだめ、
ひっかいちゃ、ああっ♡」

カリカリ♡ カリカリカリ……♡

引っ張られて縦に伸びてしまった割れ目の奥に指を入れられて、小刻みに
柔く引っ搔かれて。聞かれるがままこくこく頷いて答えるのに、赤城先輩
はちっともやめてくれない。

知らない感覚に熱っぽい息が止まらなくて、次第に背中だけでなく腰が
浮いてきてしまった。

「えっろい声……変じゃなくて気持ちいい、だろ？」

「ふえっ？♡　ンう……わ、わかんない、あうっ♡　んんっ、グー……♡♡」
「気持ちいいんだって。言えるだろ、ほら」

割れ目の中を探る指先が隠れた突起の付け根までたどり着いて、爪先でカリカリ♡　される。

じんわりと腰から昇ってくる快感に気付かないフリをしたいのに、耳元へ唇を押し当てられ、直接言葉を吹き込むように囁かれて考えがまとまらなくなってしまうた。

（やだ♡　やだこれ♡　耳元で喋るのやだっ♡　ぐるぐる喉鳴ってるの伝わってきて、怖いのに♡　頭ぼーっとして、ゾクゾクするの止まんなくなっちゃう……♡）

「くくづ♡　うう……き、きもち、いっ♡　いいからっ、やだあ……っ♡」
「なんでだよ、気持ちいいならいいだろ」

「あっ♡ やあっ♡ だ、だって、見せるだけだったのに、っひいん♡」
「無理だろ、こんな見せられて」

こすこす♡ すりすり♡ カリカリカリ♡♡

しつこいくらい引つ搔かれてお腹のむずむずが大きくなる。

むずむずを逃がしたくて腰をくい……っ♡ と浮かしたら先輩の引き締まったお腹に当たってしまつて、笑いながら「エロすぎ」と囁かれた。

（ううっ♡ 何これ♡ なんか、先っぽのそこ、びりびりして、おかしい…
…♡ 先輩の……固くて骨張った指でカリカリつてされる度、きもちよく
♡ どんどん、敏感になつちやう……っ♡）

「あー……なんか、出てきそうだな。先っぽ硬くなつて、膨らんできてる」
「ふえ……っ!?!♡ やっやだ、は、はずかしい、んううっ♡」

「出たほうがいいんだろ」
「それは、そうですけど、でも……っあ♡ お♡ ぅぅっううづ……♡」

いじられているうちに膨らんでしまったらしい。

むくむく……♡ と硬く膨らんで大きくなっていく先っぽが恥ずかしく
て隠そうとしたら、両手とも頭上にまとめあげられて、片手で抑えつけられ
てしまった。

そうしてコリコリ♡ いじる手を止められて、ゆっくり離されて。

離れる手をさみしがるみたいに、割れ目からぷく……♡ と、突起が顔を
出してしまった……♡

「……はは、出てきた」

「……やだあ……♡ も、はずかしいからっ、み、みないでくださ……っ」

「かわいい、三浦」

「……へ……っ？」

「かわいい」

ちゅ……っ♡ と、汗ばんだ額に先輩の柔らかい唇が押し当てられて。
まるで溢れ出すみたいに囁かれた一言に、息が止まる。

（え？ いま、せんぱい……私のこと、かわいいって……言った？）

驚いて目を見開いた時。

私のおでこから顔を上げた赤城先輩は——いつも無愛想な顔を熱っぽく上気させて、いつも引き結んだ口の端をほんの少し持ち上げていて。それがまるで、かわいくてたまらない、みたいな顔をしているように見える。

瞬間、ぶわりと全身に火が灯った。

「首まで赤かったけど、胸も赤くなってきた。すげー美味そ……」

「~~~~っひい……っ！？♡ あ♡ まってえ、先輩、食べちゃ、っあああ
……♡♡」

「ン……こっちも出してやるよ」

出てしまった先っぽをコリコリ♡ いじられながら、反対のまだ閉じた乳輪を咥えられて、ちゅうう……♡ と吸われてしまった。

びくびくと腰が跳ねる。ちゅう……♡ と優しく吸われるのが気持ちよ

すぎてろくに抵抗できない。

（やだやだ♡　こんなの知らない♡　ノブくんにはこんなの、されたことなかったのに……♡　かわいいつて言われたから、余計ぞくぞくして……う♡　やだあ、割れ目のところ、こじ開けるみたい舌差し入れないで♡　っあ？♡　あっうそ、だめ、おっ……おまんこ、スリスリしないでえ……♡♡）

無意識のまま誘うように腰をすりつけてしまっていたらしい。ふっと小さく笑った先輩が、乳首に舌を這わせたままパンツ越しにおまんこをスリスリ♡　撫でてきた。

それだけの刺激でまた一段と高まってしまつて、身体がおかしくなつたみたいだ。

「ふあ♡　ああっ♡　あかぎ、しえんぱ、らめ、そこ……っひい♡」

「どこだよ、そこって」

「っ♡　ゝゝっ♡　んうづ……ゝゝっお、おまんこ、すりすりしちゃ、だめえ……っ♡」

「あー、エロ……」

「えおっ!?!?♡ だめって、っあうう♡ あッ♡♡ ううだめ、それ、ほんとに……っ♡」

一生懸命言ったのにちつともやめてくれない。

まだ隠れた乳首を勃たせるように舌先を差し入れられ、ちろちろ♡ 舐められながら、何度も撫でられるうちに気付かれてしまったらしいクリトリスをカリッ♡ と引っ搔かれて悲鳴のような声が出る。

「……身体ぶるぶるしてきたな、イきそう?」

「っ!?!♡ あっやだ、うそ、なんでわかつ……んんぐ……っ♡♡」
「ン……我慢すんな、口開け。イくところ見せろ」

ちゅ♡ ちゅううつ♡ カリカリッ♡ すりすりすり♡

だんだん硬くなってきたしまったおっぱいを、割れ目の奥から引き出すように吸い付かれながら布越しのクリをすりすり♡ される。

低い声に抗えない。言われるがまま口を開くと、はっはっ♡ と犬のよう

な短い呼気が出ってしまった。

（ううっ♡ 散々おっぱい弄られたせいで♡ 布越しクリ引っ搔かれただけなのに、イクの我慢できない♡ ズーっと隠れてる乳首の先っぽちろちろ舐められて♡ しつこいくらいクリ引っ搔かれて♡ どっちも絶対勃起しちゃってきてるのに♡ あ♡ 吸うのため、きちやう、我慢むりい……♡）

「ふあ♡ あっ♡ せんぱいつ、すうのため、ほんとにッ、きちやうから……あ♡ ああダメ、つや、イク♡ イっちゃ、つあ、あああ……ッ♡」

ビクンッッ！！♡ びくびくっ♡♡ ひく、ひくん……っ♡
何度も身体が波打つ。ずっと吸われていた乳首がっぽっ♡ と割れ目から顔を出すのと一緒に、私はイってしまっていた……♡
長い絶頂感にがくがくと身体が震える。

知らない快感を叩き込まれて息も絶え絶えな私を、赤城先輩はまばたき一つせず見つめていた。

「はー……乳首引っ張り出されながらイくとか、まじでエロすぎるだろ」

「はひ……♡ はひ……?♡ ふう……っあぐ!♡♡ やっああ、ちくび♡ 触っちゃだめ、今だめえ……っ♡♡」

「隠れてたから? すげえ敏感……」

「っひぐう♡ やッ♡♡ あぐ♡♡ せ、せんぱい、乳首やめて、ほ、ほんとにい……っ♡」

ぷっくりと顔を出した両方の乳首を親指と人差し指で摘まれて、すりゅすりゅ♡ 捏ねられて。

いったばかりの身体には苦しいくらいの快感にじんわり涙を滲ませながらふるふると首を振ると――。

（あ……っ? せ、せんぱ、……え? かお……こわ、……え?? なんて怒って――あっ??♡）

青筋を立てて片方だけ眉を吊り上げ、明らかに怒っているような表情に目を見開いた瞬間、ごきゅ、と、大きく唾を飲み込む音が響いて。

ぬちゅ……♡♡ と音を立てておまんこの筋に指を食い込ませて撫でられてしまった。

「ふあっ？♡ あっなんで、っひいん♡」

「乳首やめてほしいんだろ」

「んう……っ♡ ち……ちがくて、うあっ♡ な、なんで怒って、お♡」

ぐるぐるとお腹に響く低音は相変わらず怒っているみたいで、こわい。思わず震えたまま縋るように手を伸ばすと、はー……と大きなため息と共に大きな身体にぎゅっと抱きしめられた。

「……怒ってねえよ。や、怒ってるけど」

「っ?? な、なに……どういうこと、」

「怒ってんのは」

どういふことかよくわからないまま、先輩の身体、筋肉質であつたかいなあ——と場違いに思っていたら、むに、とほっぺを柔らかくつままれる。

少し吊り目気味で睫毛の密度の高い、形の整った目もとに視線が奪われたときだった。

「お前がかわいいからだっつの」

「へっ?? か、かわ……っん、んむ……っ!??♡」

ちゆう……♡ と、少し厚い唇が押し当てられて、深く重なった。

頭が真っ白になる。キスされたことよりも、その前の言葉が気になった。怒ってるように見えてたのは、じゃあ、それは、つまり。

長く深い口付けに酸素が足りなくなつて、何かが繋がりがけた脳内の回路が止まつていく。

「ン……っはぷ、……ふう……♡ あ、赤城、せんぱ……っ♡」

「どこもかしこも柔らかけえのな、お前」

「えっ!?? で、デブつてことですか……っ!??」

「違えよ。むしろもつと食えよ」

「結構食つてます三浦……じゃなくてっ! わ——わたし、か、かわいいん

ですか……っ？」

「かわいいだろ。滅茶苦茶」

即答されてぼんつとまた全身が燃えるように熱くなる。やっぱり冗談じゃなかった。

安心したようなドキドキするような、そんな心地に浸っていたらまた、ぬちゅん♡ と、ぬるついたおまんこに指を這わされてしまった。

慌てて腰を引こうとしたのに、また噛みつくみたいなの口付けが襲ってきて逃げられなくなる。

「んむっ……♡ せ、せんぱい、んうっ♡ ま、まっひえ、っうあ♡」

「かわいいし、エロいし。そんな顔他のやつに見せてたかと思うと、マジで腹立つ」

「ふえっ？♡ ど、どういう……あ♡ あっだめ、直接、うああ……っ♡♡」

ぬち♡ ぬち♡ ぬちゅっ♡

先輩の骨ばった指先がパンツの中に入ってきて、先程の刺激ですっかり

勃ってしまったクリトリスを撫でられる。

すっかり愛液でヌルヌルになってしまったそこを確かめるように何度も往復されて目の前に火花が散った。

（せ、先輩が怒ってたのって、そういう理由だった、の……？♡ どうしよう、そんなの、……嬉しくて♡ これ以上ダメだって思うのに、全然嫌がれなくて……あ、ダメ♡ ぬるぬるのクリやさしく撫でられると、頭ばちばちして♡ また、きもちよく、なつてきちゃう……♡♡）

「三浦、顔とろけてきてる。クリ好きなんだな」

「あ、あつ♡ ふあつ？♡ そ、それはあ♡ せんぱいが……じょうずだから、ああん♡」

「……あんなま煽んなよ」

ぬりゅ♡ ぬりゅ♡ ちゅこちゅこちゅこつ♡

ため息と共に指の動きを激しくされて甘ったるい声が溢れる。動きに合わせるみたいへこ♡ へこつ♡ と揺れてしまつて、恥ずかしいのに止

められない。

高鳴る鼓動も抑えられない。大きなため息は、私に興奮しているからだ
知ってしまったから。

「っ♡ ふぐ♡ ううー……♡ せ、せんぱ……っだめこれ、きもち、よ
しゆぎてっ、っお♡」

「エロ……じゃあ、こっちは？」

「んう？♡ な、なに、あっ！？」

執拗にクリトリスばかりをいじめていた指がぬるついた割れ目を辿り、
つぶん……♡ とおまんこのナカの入口に沈んだ。

瞬間、びくりと身体が強張る。

縦るように赤城先輩のワイシャツをぎゅっと握った。

「っや、せんぱい、ナカ……ナカやです、こわいい……っ」

「怖い？ なんでだよ」

「ナカは……その、い、いたい、から……っ」

「……は？」

先輩の片眉がぴくりと上がって、指が止まる。

ナカは痛くて怖い。ノブくんといえっちの時——最近ほとんどできていなかったけれど——指でされるのが、毎回痛くて怖かったのだ。

どう言おうか迷っているうちに先輩は、ああ、と察したような声を出した。

「アイツに指でされんの、痛かった？」

「……うう、はい……っ」

「クソ野郎がよ……」

いつも怖いはずの荒い言葉が今だけはなんだか嬉しくて、きゆうん、と心臓が震えてしまう。

先輩はまた、フー……と大きなため息をついてから、触れるだけのキスをくれた。口も顔も荒っぽいのに、触れる仕草だけはひどく優しい。

「痛かったらすぐやめるから。深呼吸しとけ」

「ふあ？♡ はっ、はい……っ」

言われるがまま深く息を吸って吐いた瞬間、ちゅぷん♡ と恥ずかしい音を立てて先輩の指が割れ目にまた潜り込んできた。

（こ、怖い……けど、ノブくんとしてたとき、そもそもこんなに濡れたこと、なかったし……っあ♡ なんか……入口つぼつぼされるの、ヘン……っ♡）

つぼ♡ ちゅぽ♡ と入口の浅いところに差し入れられてはゆつくりと戻されて、痛くはないけれど何だかむずむずする。

何も言わず深呼吸を繰り返す私に、平気そうだと判断したらしい先輩が身体を持ち上げた。

そのままクリトリスを親指でゆるゆる撫でながら、にゅぷぷ……っつと少し深くまで指を差し入れられてしまう。

「あ♡ ふあ、おッ♡ だっだめ、くり、いっしょにしたら、ああっ♡」
「こっちの方が痛くねえだろ」

「んっ♡ んん♡ そ、ですけど、おあっ♡ うああ……っ♡♡」

すり♡ すりすり♡ ずにゅゅ♡ ぬちゅぬちゅぬちゅっ♡

ぴんと勃起しきったクリトリスを捏ねるのと一緒にナ力をずにゅずにゅ♡ 擦られて背筋が仰け反る。

どうしよう、ちつとも痛くない。こんなのおかしい、そう思うのにお腹側の膣壁をスリスリ♡ 撫でられただけでビクン♡ と大きく身体が揺れてしまう。

「Gスポ気持ちいいか？ ここ撫でると入口きゅうきゅう締まる……」

「うあ、あっ♡ ううやだあ、せんぱい、そこお♡ ヘンだから、やめてくだひゃ、ああっ♡」

「やだ」

「な、なんでえ……っ♡」

「痛くねえ思い出に上書きしたほうがいいだろ」

上書きなんて、そんな言い方ズルいつて思うのに、言い返せずに口を噤ん

でしまう。

先輩はそんな私を見つめてふっと笑うと、また指をにゅぽにゅぽ　出し入れしはじめた。

（あ♡　あ♡　ダメこれ♡　ごまかせない♡　全然痛くない♡　ナカの弱いところ、何回もずにゆずにゆ擦られるのきもちよすぎるよ♡　どうしよ、ナカでイったことなかったのに♡　先輩の指、きもちよくて、ううつ♡　すごい、きちやう……♡♡）

「……なんか我慢してんな、痛えか？」

「はえっ？♡　い、いたく、にやいつ、うああ♡　な、ううなんか……つき、きちやいそうだから、んああっ♡」

「イきそ？　ナカでいくの初めてか？」

こくこくと頷くと先輩は眉根を寄せて「はー、クッソかわいい……」と呟いた。

それだけでもぞくぞくと背筋が震えてしまうのに、追い立てるようにク

リトリスをこねこね♡　　されて目の前が真っ白になっていく。

「あ♡　あ♡　　らめ、せんぱ、せんぱあい……っ♡　　ううくる、おっきいの、きちやううつ♡」

「ん、いいよ。ほら、……三浦」

「ふあ？♡　　あ、んんっ♡　　うう、せんぱい、赤城せんぱい……っんう♡」

所在なく手を伸ばしていたら、覆い被さってきた赤城先輩に名前を呼ばれて抱きしめられた。

あやすような柔らかいキスが降ってきて、嬉しくて視界がぼやける。

そのまま、先輩の筋肉で覆われた逞しい腕にぎゅうつと抱かれて、すっかり潤んだナ力をくちゅくちゅ♡　ぬちゅぬちゅ♡　擦られて。

私は驚くほどあっけなく、昇り詰めてしまった。

「んう♡　ふうう……っあ♡　　せんぱい、いく、いくう♡　　イツちやうう……っんううう……っ♡♡」

びくびくっ♡　ぞくっ♡　ぶるぶるぶる……っ♡♡♡

今まで感じたこともない深い絶頂に身体が小刻みに震える。

全身が気持ちよくてたまらない。赤城先輩は私が身体を震わせている間ずっと、ぎゅうう……♡　と抱きしめてくれていて、甘い余韻が長引いた。

「はー……無理、可愛すぎ、全然止められねえ……」

「は、ふあ……♡　あ、あわ、せ、せんぱ……っえ……っ??」

眩かれた一言にきゅん♡　とまた小さくときめきつつ、ようやく力の抜けてきた身体で自分から先輩にしがみつこうと身じろいだ——
その瞬間だった。

(……エッ??　嘘、……嘘、え?　何これ、……デッ……、……
……???)

私の膝にぐりゅっ♡　と当たった先輩の、スラックスをきつく持ち上げる、お……おちんぽは。

ちよつと理解ができないくらい、凶器のような大きさと硬さをしていた。



（中略。ゴム有りよしよしえっち↓理性ブチギレ野獣セックス）



あれから一週間が経った。

あの日、赤城先輩に抱かれた私はと言えば——……

「うええんつ、また惨敗だあ……」

「なんで早口言葉だけやたら上手くなって契約は取れねえんだよお前は……」

——特に何も変わることなく、今日も営業が上手くいっていなかった。会社に戻り、情けない思いで先輩の十歩くらい後ろをトボトボと歩く。成績最下位からはなんとか脱したもの、結局赤城先輩がいることで緊張してしまうので噛みまくり、いまいち自分のペースを掴めずにいた。

（まあ、初日みたいに緊張してっていうよりは、ドキドキしちゃってるからなんだけど……）

先輩はあれから変わらない、というより忙しそうだ。

当然だろう、私の教育をしながら自分の営業先を周り、夜は接待や取引先の飲み会に呼ばれて、そのぶん朝早くから出勤しているのだから。

（私のことなんか気にしてる余裕ないだろうな。先輩からしたら、巻き込まれ事故みたいなものだっただろうし……）

赤城先輩にとってはきっと、あんなワンナイトはよくある話なのだろう。けれど私にとっては、長年のコンプレックス解消という大きな出来事

だったのだ。

もう一週間も経つのに、いまだに目を合わせるとあの日の先輩の顔を思い出してしまう。

（はあ、せめて意識しないようにしたいのに……わっ！？ 何、い、痛……！）

どんつ、と肩に衝撃が走る。

背の高い女性社員にぶつかられてしまった。

謝りもしないし、振り向きもしない。

——まただ。

これも今の私を悩ます原因の一つだ。

赤城先輩が教育係になってからというもの、先輩のファンであろう派手な女性社員からの嫌がらせが始まってしまった。

今ぶつかって来たのは——

“まじで邪魔なんだけど”

“私も成績落とそっかな？笑”

「あ、すみません間違えました」

業務で使うチャットツールの、上司のいない連絡グループで誤爆してきた人だ。

絶対に誤爆じゃない。私しか席に座っていないタイミングで通知だけ送ってきて、すぐに消したのだから。

（うう……邪魔なのは、分かってるよお……。けど成績が……）

早く成績を戻さなきゃと思えば思うほど、空回ってしまう一方だ。

ままならない気持ちで俯きながら廊下を歩いているうちに、どしんと。また、やたらと硬い何かにぶつかった。

「いだっ……!？」

「前見て歩け、危ねえだろ」

「あつ、先輩……ご、ごめんなさい」

ぶつかったのは先輩の胸筋だった。

私が俯いている間に振り向いていたらしい。

どこか訝しむように片眉を上げて屈まれる。外国人のような彫りの深さをして目元が迫ってきて、どきりと心臓が高鳴った。

「お前、今なんか……ぶつかられてなかったか？」

「あつ？ ……いい、いえ、そんなことは」

なぜか正直に言うことができない。

先輩の真っ直ぐな視線から逃げるように少し視線をずらして身を引いたら、本格的に屈まれてしまった。

「なんで嘘つくんだよ」

「ひえ……」

なぜバレてしまうのだろう。

そう思っていたら先輩の大きな手が肩に伸びてきて、私の肩についてい

たらしい一本の髪の毛を掬い取った。

ぶつかつた時に落ちたのだらう、私のものではない、長い巻き髪だ。私の前で屈んだまま、手に取つた髪の毛を見つめている先輩に背筋がひやりとする。

（～）や、やばっ……こんなところ見られたらまた嫌なこと言われる……！

嘘がバレてしまったことよりも、すれ違つた彼女にこの現場を見られてしまうことの方が怖い。

私は思わず先輩の胸板へと手を伸ばし、とん、と押した。

先輩は目を丸くしていたけれど、気にしている場合ではない。

「私は大丈夫なので……そつ、そんなことより資料室行きましょう！しばらく回つてないエリアとか、探さないと」

「……。……。おう」

俯いたまま先輩を追い抜かして、資料室へと歩き出す。

先輩は訝しんだ様子ながらも頷いて、ついてきてくれた。

部屋まで入ってしまえば赤城先輩と一緒にいるところを誰かに見られる心配はそうそうないだろう。

私は焦る気持ちをこらえながら、奥まった場所にある資料室へと歩みを進めた。

「せんぱーい、あれ、あれ取ってください!」

「資料室入ってから急に元氣だなお前は。どれだよ」

「へへへ……あの一番高い段の、黄色いファイルです!」

これで一安心だ。

資料室なら営業中みたいに緊張することもないし、他の社員に見られることもなく、気兼ねなく先輩と話すことができる。

ホッとした私はいつも一人だと取りにくい、高い位置にあるファイルを片っ端から先輩に取ってもらっていた。脚立の必要なく悠々と手が届くのは本当に羨ましい。

「ほら。それで、お前はまだ傷心なわけ？」

「ありがとうございま……えっ」

ファイルを受け取った矢先、業務連絡みたいなトーンで嘘みたいな言葉が飛んできて驚く。

見上げた先輩はいつもと変わらないどこか不機嫌そうな表情をしていた。もうちよつと何を考えているのか分かりやすい表情をしてほしい。……あの時みたいにな。

「あついえ、それはもう……お、お陰様でだいぶ元気な感じです……！」

「ふーん？ その割には相変わらず噛みまくってるけどな」

「う……それはその、緊張しちやつて……ひやつ？」

先輩の大きな手がふわりと頭を掠める。

驚いていると「ちよつとじつとしてろ」と言われた。あまり使われていない奥まった場所を探しているからか、頭に大きな埃がついていたらしい。

柔らかく払ってくれる仕草がなんだか撫でられているみたいで、じわり

と頬に熱がこもる。

思わず逃げるように一歩下がった。

「……あつ、ありがとうございます……！　こ、この辺埃っぽいですね」
「だいぶ前の資料だからな。最近まとめて処分したらしいけど」

「ええ？　その割にはどこもギチギチで……あつ、ここは空っぽだ」

近くにあったスチール製の大きな書庫棚を開けたところ、何も入っていなかった。

棚板も外されている。少し古く扉の建付けも悪そうなので、処分予定なのかもしれない。

次の棚を見よう、と思って閉めようとする——

「三浦」

「ひえ……っ？」

「お前、なんでそんな緊張してんだよ」

この間みたいな距離感で、耳元に先輩の声が届いた。

思わず肩がびくりと揺れる。さっきから少しこもっていた熱がぶわりと上がってしまう。

そこで気付いた。

そういえばこの一週間、私と先輩は——こうして、二人きりには、なっていないかったような。

「営業中も、さつきも。今もやたら元気になったかと思えばまた緊張してるだろ」

「そ、そそつ、そんなことは……ただその、三浦……」

どうしよう。なんて言えがいいのだろう。

慌てているうちに先輩の心配がまた近付く。屈んだ先輩の息遣いが頭のうしろのほうから伝わってきて、とても振り向けない。

「もう、赤城先輩に迷惑かけちゃいけないと、思つて……!」
「迷惑？」

「ほら今日も、この間とかも、あの……おつ、お世話になりましたし、これ以上は……っ」

「お前、アレのことお世話されたと思つてんのかよ」

先輩の手が、またふわりと頭へと触れる。

今度はさつきとは違う。明確な意図を持った手つきが髪を掬い取つて、乱れた髪を直すように、ゆつたりと梳き撫でられた。

わずかに耳を掠めていくのは、わざとなのだろうか。

「……せ、せんぱいつ、あの、ちよつと、くすぐりたいんですが……っ」

「俺はいいけど」

「へっ？」

「世話。別に嫌じゃねえし」

「えっ、え……うそ、ひえっ」

背後を取られたのは、もしかするとマズかったのかもしれない。物凄く今更だけれど。

先輩の息遣いがさつきよりも近くなって、もうどこか触れてしまうんじゃないかと思う。

「飯も食わしてやろうか」

「えっ？ いっ、いや先輩それは世話っていうか介護かもです、ひやつ」
「そういう意味じゃねえよ」

まるで仕留められるみたいに、項に唇が当たる。

驚く間もなく、ちゅ……っ♡ と柔らかなリップ音が響いて、ぶわりと全身の血が沸騰したみたいだった。

真っ赤になったまま縮こまるだけで何もできない私に、先輩は血管の浮いた筋肉質な腕を回してきて、やばい逃げられないかも——と、そう思った時だった。

ガラ、と資料室の扉が開き、誰かが話しながら入ってきた。

「部長。もうやらないでよくないですか、あんな制度」
「うーん……そう言っても、本人の希望だからね」

（あつ？　この声、部長と——……さ、さっきぶつかってきた人だ……！）

幸いなことに私と先輩がいる棚は、入口からすぐ見える場所ではなかった。

けれどこんな所で一緒にいられるのを見られでもしたら、とんでもなく怒らせるに違いない。

焦った私は渋々離れようとする二の腕をがしりと掴んだ。

「！？　オイ、何——」

「せせせ、先輩、かくれてえ……っ」

驚く先輩に潜めた声で懇願し、空っぽのスチール棚の中に入る。

音を立てないように慎重に扉を閉めた。どうやら資料を探しに来た訳ではなく、話をしにきただけのようだ。奥の棚には来ないようだし、二人とも話に夢中でこちらに気付いた様子はない。

（い、いるのはバレてないみたい、よかったあ……。ていうか、何の話だろう。私のことかな……）

「成績、あんまり良くなっていないみたいですし」

「うーん、しかしまだ一週間くらいだろう。もう少し様子を見ようかと……」

——やっぱり私のことだ。

たぶん私と赤城先輩のことを、部長に直接抗議しているのだろう。

とんでもない場面に出くわしてしまった。固唾を飲んで会話を聞こうとしていたら、耳元に獣のような低い声が聞こえてくる。

「……おい」

「え、あ……っ!？」

その時によくハツとした。

赤城先輩と、さつきよりもはるかに密着していることを。

私には余るほどの大きさのスチール柵だが、先輩の身長と体格はとも

簡単には収まらない。先輩は私に腕を回したまま、窮屈そうに背を屈ませて膝を折り、どうにか中に収まっているという有様だ。

「ご、ごめんなさい先輩っ、体重かけてくれて大丈夫なんで……！」

「大丈夫なわけねえだろ、っーかなんで隠れてんだよ」

「あ、あとで話しますから……っ」

ひそひそ声で話しているうちに向こうの女性社員がヒートアップしてきたみたいだ。

大きな声に思わず身が固くなる。

「こういう例を作るのは良くないと思うんです。足を引つ張るだけじゃないですか」

「いやでもね、会社というのは皆で協力して……」

「協力して、利益を取っていくものですよね？ このままじゃトップの成績も落ちちゃうんじゃないですか?!」

聞こえてくるハッキリとした声に、喉が詰まる。

——そうだ。先輩はずっと、自分の仕事は減らさずに私の教育もしているんだ。

やつぱり迷惑をかけちゃダメかも、と唇を噛み締めていたら、不意に後ろの気配が身じろぐ。

「……ちよつと、離れろ、お前」

「えっ？ あ、えつと……うう、さすがに無理かもです……あっ？」

聞き慣れない、どこか苦しげに潜められた声を不思議に思いつつ少しでも離れようと身体をねじった時——ごりゅっ♡と。

腰あたりに何か、大きくて硬いものが引っかつた。

（ひえ……っ？ あ、あ……これ、先輩の……っ）

覚えがありすぎるほど、ある。

あの日これで、形を変えられるほどに責められたのだから。

この一週間何度となく思い出してきた記憶がまた鮮明に頭の中に浮かび上がって息が詰まった。

「せ、せせせ、せんばい、これ……っ」

「クソ……言っとくけど不可抗力だからな」

「ふえっ、な、なんで」

「さっきからケツ押し付けてきてんのそっちだろうが」

「う、うそ……」

確かに会話を聞こうと扉に意識を向けているうちに前かがみになっていたかもしれない。

そんなの恥ずかしすぎるし申し訳ない。——けれど。

（せ、先輩って……やっぱり、ホントに私の身体で、興奮してくれるんだ……♡　うう、どうしよう、こんな時なのに……この間のこと思い出して、ドキドキしちゃう……っ）

自分の心臓がうるさくて、向こうの会話が次第に遠くなっていく。離れようとしても身体をねじったせいでうまく力が入らない。

その間にも先輩のおちゃんぽは、ぐぐ……っ♡　ぐぐぐ……っ♡　と大きくなっていく。

思わずぐぐりと唾を飲み込んだ。

「せ、せんぱい、……」

「クツソ……離れろって、おいッ……!？」

恐る恐る手を伸ばして、硬くなったそこを確かめるように包む。心臓のドキドキが止まらない。顔を見られない位置でよかった。たぶんすぐくみつともない顔をしているし、おでこまで真っ赤だろうから。

「三浦が……その、き、緊張しちゃうの……これの、せいです」

「……ああ？」

「先輩と、その……したときのこと、思い出しちゃう、から……」

どんどん語尾が尻すばみになっていく。こんなこと言って何になるのだろう。

でもなぜか、このままは嫌だなと思ったのだ。せつかく先輩が興奮してくれたのに、このまま何もせず収まってしまったら、なんだか寂しい気がする。それでもどうしたらいいかはよく分からない。

先輩の厚い胸板に頭を寄せて、硬くなつたそこをすり、と不器用に撫でると、先輩はフー……と、あの時みたいなの、大きなため息を漏らした。

「お前……分かって、やってんだろ？ ……？」
「えっ、あ、~~~~っあ……♡」

お腹に轟く低い声と一緒に、ずっと回つたままの先輩の、血管の浮いた二の腕が下へとずれていく。

力のこもつた手のひらがスカートの中に入っていくのをスローモーションみたいに感じていたら、突然太ももをむにゅ♡と揉み込まれた。

たつたそれだけなのに、スイッチが入ってしまったみたいに身体がビク♡と震える。

(あ……っ♡ こ、こんなのダメなのに……! 近くに人、いるのにつ……自分からすりすり身体押し付けちゃったから、抵抗できない♡ 先輩のお、おちんぽも……どんどんおつきくなってるよお……♡)

離れなきやって思うのに、足の付け根をスリスリ♡ 辿られて力が抜けてしまった。

慌てて先輩のシャツを掴んでみるけれど狭くてバランスが悪く、ずるずる身体が下がっていく。

震える足でなんとか立っていたら——先輩の手がスカートの中のおまんこまで辿り着いて、もにゅん♡ と支えるように揉まれてしまった。

「ツひ♡ ん、ん……っ♡ せ、せんぱい……っだめえ……♡」

「こんな所でそっちから誘つといて、何がダメなんだよ」

「ちがッ、こえ、でちやうから……んぐうっ!??♡」

唸るような声に焦って言い訳していたらもう片方の手のひらで口を塞が

れてしまった。

乱暴なほどの仕草なのになぜか余計に興奮してしまふ。

痴漢されるみたいにもにゅもにゅ♡ おまんこを揉まれているだけで、ふーっ♡ ふーっ♡ と恥ずかしい息が出てしまった。

向こうではまだ部長と女性社員が、私たちのことを話し込んでいる。

（も、もう何話してるのかよくわかんない……っ♡ 先輩の指にばかり意識いつちやう♡ くち、抑えられてて息苦しくて♡ 頭ぼーっとするのに……あ♡ だめ、クリのとこばかり撫でられてる♡ うう、そうだ、クリ好きなの、もうバレちゃってるんだ……っ♡）

スリスリ♡ スリスリ……♡ と、先輩の骨ばった中指が的確に布越しのクリトリスを探し当てて撫でてくる。

たったそれだけなのに、一週間待ちわびたみたいにくくむく♡ と勃起してしまつてたまらなく恥ずかしい。

「なあ、……この間より興奮してる？」

「ッ！？♡　　ヅ……っして、にや、んんう……っ♡♡」

ひそひそ話みたいなたんてで囁きかけられてびくっ♡　と肩が揺れた。
必死に首を振るけれど、嘘だ。

狭い空間でほとんど動けず、無理やりされているみたいに口とおまんこを抑えつけられて、それなのにふーっ♡　ふーっ♡　と息を漏らしながらみつともなくクリトリスを勃起させてしまっている。

先輩はそんな私を見てクツと喉奥で笑ってから、からかうように「声抑えとけよ」と囁いた。

「……っ！？♡　　ま、っんう♡　　ッ♡♡　　っふ、うぐ……っ♡♡」

こりゅっ♡　こりゅっ♡　くにくにくに♡

様子を見るみたいに撫でていた手が、明確な意図を持ってクリトリスを捏ね回す。パンツの上からでもわかるくらい主張してしまっている突起を指腹で撫でられて、爪先で根本を引っ掻かれる。

（ううっきもちい……♡　だめ♡　こえ、こえ抑えなきゃ♡　こんな、こんな絶対……バレちゃったらダメなんだから♡　カリカリしてもらうの、きもちいいけど……絶対声出しちゃ、だめ、っうあ？♡　あっやだ、なんでパンツ引っ張るの♡　やだあ、もつと敏感になっちやうう……♡♡）

くいっ♡　と引っ張られたパンツの上からコリコリ♡　コリコリ♡　と何度も先っぽを引っ搔かれて、うずうずと腰が揺れる。

どうにか声は抑えているけれど、善がっているのは完璧にバレてしまっているみたいだ。

荒い呼気で狭い書庫棚の中に熱がこもっていく。

「三浦」

「んっ♡　んっ、んえ……っ？♡」

「もう濡れてきてる」

「……っ！？♡　やあっ、いわ、いわないで、んうづ……♡」

ぬちゅっ♡　にちっ♡　にちにちにぢ……っ♡♡

じわ……♡ と溢れてしまった愛液で濡れてしまったパンツごと捏ねられ、耳元に直接声を吹き込まれる。

必死に声を堪えるけれど、先輩の大きな手の隙間から「あ♡ あ……っ♡」と漏れ出てしまうのが止められない。

「静かにしてろって。バレたくねえんだろ」

「うう♡ だって、これ……♡ きもひ、よくて……んん、くくくっ♡♡」

ぬちぬち♡ 捏ねられる度、身体中の熱が上がる。

バレたらいけない状況で興奮してしまっているのか、それとも、一週間ぶりに触ってもらえたのか嬉しいのか。自分ではもうよくわからない。

どっちにしても良くない傾向な気がする——そう思っても、ゆらゆら♡ 腰を揺らして、媚びるみたいに先輩のおちんぽにお尻を擦り付けてしまうのをやめられない。

（うう……♡ 愛液出すぎて先輩の指までぬるぬるになっちゃってる……♡ 恥ずかしいのに、とろとろの指でにゆりにゆり♡ ってクリ擦って

もらうの、きもちよすぎるよお♡ あ、あ……っ♡ やばい、こんなちよつと撫でられてるだけなのに、イク準備始めちゃってる……っ♡♡)

どんどん短くなる吐息を我慢したくて口を覆う先輩の指を軽く食んだら、息を詰めた音と共にクリトリスをいじる指を早められてしまった。

ぬるぬるの先っぽをにゅちにゅちっ♡ と潰されて、根本をカリカリカリ……♡ と引っ搔かれて、身体がどんどん昂ってくる。

「まだイクなよ」

「ふづっ！？♡ んうぅっ……うづ、なんれえ……っ♡♡」

「あの二人そろそろ出てきそうだから。イクなら出てっからにしろよ」

あの、ふたり。そうだ。

二人にバレないように、必死に声を堪えていたんだった。

快感でふやける頭でふとそちらに意識を向けると、悔しげな女性社員の声が聞こえてきた。何を言っているかまではわからないけれど、たぶん提案が失敗に終わったのだろう。

どこかホツとした気持ちで力を抜くと、またカリカリッ♡ カリカリカリ♡ と先っぽを引っ搔かれて背筋が仰け反った。

「ヅ〜〜〜!?!♡ ふう……っ♡ せんぱ……かりかり、らめ、いっひやうから、ああ♡」

「こらえてろって。ほら、噛んでいいから」

「んむっ……ふう……っ♡ んっ、んうー……っ♡♡」

ぬちぬち♡ ぬちっ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ……っ♡

こらえろって言うならやめてくれればいいのに、先輩の指は勃起しきつたクリトリスを的確に捉えて捏ねてくる。

なけなしの理性で歯を立てないように先輩の指を甘噛みしながら、必死に絶頂感をこらえていたら——ガチャリとドアの音が響き、二人の足音が遠のいていった。

「……………はー、ったく。こっち来られてたらヤバかったな」
「っぷあ♡ はあ……っあうっ♡ あっ♡ せん、せんぱ、もおむり、っう

ああ♡

「おい、出てったからってあんま声出すなよ」

「おッ♡ ううっだつて、きもひいい、これ、……ふあ?♡」
「……誰にも聞かせたくねえんだつて」

どうして、と聞く前に顎を持ち上げられて、屈み込んだ先輩にキスで唇を塞がれた。

気持ちよくて頭がぼわぼわする。自然と甘えるみたいに身体をすり寄せていたら、パンツの中に指が入ってきて、直接ぬちゅぬちゅぬちゅっ♡ とぬるつく指でクリトリスを扱かれてしまった。

(ああ♡ あ♡ キス、きもちいい……♡ ゆるゆる舌こすられながら、クリ直接なでなでされると♡ 頭ぼーっとして、きもちいいのしかわかんない♡ 先輩のことしか考えられなくなっちゃう♡ ううだめ、いく、いく、もういっちゃう……♡♡)

「ん、んむうつ、うう……♡ つうういく、せんぱ……っもおいく、いつ

ひや、つううづ………♡♡♡」

びくっ♡　びくびくびくっ♡　ぶるぶるぶる………♡♡

頭に甘ったるい火花が散る。私は先輩とキスをしたまま、狭い棚の中で必死になって足を突っ張らせながらイってしまった……♡

ここは会社で、今は就業中だっていうのに、そんなこともどうでもよくなるくらい気持ちが悪かった。

ぴくぴく震える身体をしつかりと抱きとめられ、たっぷりの余韻を味わったあと——先輩はおもむろに身体を離して、棚の扉を開けてしまった。

「はー、あっちい………」

「ふあ………？　あつ、せ、せんぱい？」

「なんだよ」

「あ………」

これ以上する気はない、みたいに出ていこうとする先輩の服を慌てて掴む。

だって別に、私一人で気持ちよくなりたかったわけじゃない。先輩が興奮してくれたのをなんとかしたくて、それで身を寄せていただけで。

「お、おわりですか……っ？ その、せんぱいのも……」

「は？ お前何、つちよ……！」

震える手を伸ばし、まだ硬いそこをすり……♡ と撫でる。

ぼんやりした頭で思い出す。ノブくんとも、ちよつとはこういうのをしたことがあった。確か手でするときは、握り込んで——先輩のは太すぎて指が回らないけれど——思うよりも力をかけて、しごくのだ。

覚悟を決めて手に力を込めようとしたら、肩を掴まれべりつと剥がされてしまった。

「あえっ、な、なんでえ……っ？」

「また誰か来たらどうすんだよ。あー、クソ……」

離れて柵の中から出ていってしまう先輩にきゆう、と心臓が縮む。

扉まで早足で歩く先輩の後ろ姿を眺めて、やっぱりこれで終わりなんだと、どこかさみしい気持ちで自分も柵の中から身体を出したら、カチャリと小さく鍵の音が響いた。

「あ……せ、せんぱいつ？」

「……一気に期待した顔すんなよ。可愛すぎて腹立つ」

かくかくの膝のままどうにか立ち上がると先輩が戻ってきて、抱き上げてくれた。

うれしくて抱きつこうとしたのに、すぐに隅っこにあった机に降ろされてしまう。恐らくこちらでも処分予定の、古くて重い机だ。

（あ、こ、ここでするのかな……？♡　なんでこんなにドキドキしちゃうんだろ……ぎやつ、せ、先輩のおちんぼ……相変わらず、デ、デカ……っ♡）

ベルトを外し、ストラックスを寛げた先輩の股間からべちん♡　と勢い良くおちんぼが飛び出して来る。

どうしよう、やつぱり大きすぎるし慣らさずに入るかな、なんて考えていたら突然、太ももを抱え込まれた。

「ちよつと貸せ、太もも」

「うえ？　っは、はいっ？　なんで……ひやうっ、んんっ？♡」

寝そべった私の、閉じた太ももとおまんこの間に、ずにゆう……っ♡　と先輩のおちんぽが差し込まれる。

なんか変な感じだ。戸惑っているうちにさっきイカされたことで散々溢れさせてしまった愛液が先輩のおちんぽにまとわりついて、腰を揺らされる度、ぬりゅっ♡　ぬりゅんっ♡　と滑るようになってきた。

「っふう♡　せ、せんぱ、んんっ♡　い、いれないんですかあ、っあ♡」

「お前な……ここどこだと思っただよ。慣らす時間ねえし、今ゴム持っ
ねえっつの……っ」

「うう……でも、っあ♡　あ、あ、ふあっ♡」

どこか苦しげに言われながらヌコヌコ♡ 太ももの間を出し入れされる。愛液まみれの裏筋でクリトリスが擦れて、だんだん気持ちよくなってきた。しまった。私の足を抱える先輩は、少し頬を上気させたまま怒ったような顔をしていて、どこか安心する。

（赤城先輩……やっぱ興奮してくれてるんだ、うれしい……♡ うう、にゅこにゅこ♡ つてクリ擦られると……イったばかりなのに、また気持ちよくなってきちゃ、っあ、あ？ シャツのボタン、とられちゃってる……っ？♡ どうしよ、またおっぱい、見られちゃう……っ♡）

「ひっ♡ ひうっ♡ せ、せんぱ……ぬぐの、はずかしい、あうっ♡」
「今更だろ。あー、これエロいな……」

少し性急な仕草でボタンの取れたシャツを捲られ、ブラジャーをずり降りされ、ぷるんっ♡ とおっぱいを丸出しにされる。

あの日先輩に出してもらった乳首は結局また中に隠れてしまっていた。

「うう……あ、あんまり見ないでくださ、んうう……っ♡」
「見てえから脱がしたんだよ。また隠れてんな、乳首……」

太ももを抱えてヌコヌコ♡ 出し入れされたまま、確かめるように乳輪をつままれてスリスリ♡ されて腰が震える。

こんなエッチなことをされて、恥ずかしいのにさっきから嬉しくてたまらない。

今までずっと、自分の身体は変で魅力がなくて、浮気されてもしかたないって、そう思っていたから。

「ふう、んんっ♡ せんぱっ、うグー……♡ さきっぱ、しなくて、いいですからあ、あっ♡」

「なんでだよ、乳首気持ちいいつつつてたろ」

「っそ、ですけどお♡ で、でも……の、ノブくんは……っ」
「あ？」

「もむほうが、興奮するって、うあっ！？♡ あっ♡ あっなに、はげし、んんっっ♡♡」

こりっ♡ コリコリ♡ にゆりにゆりにゆりっ♡

ぱんっ♡ ぱんっ！♡ ぱんっ！♡♡

乳輪ごと乳首を捏ねられながら激しく突き入れられて目の前に火花が散る。

乳首だけでも腰がじんじんするくらい気持ちいいのに、動かされる度にバキバキのおちんぽでクリトリスがにゆるにゆる♡ 擦れていつても考えられないくらいだ。

「うお♡ んうっ、あ、あゝゝっ♡ せんば、まって、つぶあ♡ まっ、

ううっはやいっ♡」

「やめてほしけりや二度とすんな、そいつの話」

「なっなんでえ、あ、うあっ？♡ なか、ほじっちや、らめ、あっううぐゝゝ……♡♡」

「あーくそ、マジでイラつく……」

ばちゅばちゅばちゅっ！！♡ と腰を叩きつけられながら乳輪の奥の突

起をコリコリ♡ ほじられて、なんでなのかちゃんと聞きたいのにまともな声を出すことができない。

どんどん頭に霞がかかって、あの時みたいにも心も身体も、先輩でいっぱいになっていく。

（ううっ、なんで怒らせちゃったか、聞きたいのに♡ だめ♡ おっぱいの割れ目もぞもぞ探られて♡ 乳首こりこり捏ねられながら、おまんこズリズリユ擦られて♡ きもちよすぎて、訳わかんない♡ どうしょ、このままじゃ、また、きちゃう……っ♡♡）

「ふうっ♡ ふうっ♡ っせ、せんぱい、いいっ♡ ほんとに、ま、っあ
あお♡♡」

「は……そろそろ出るから、もうちょい我慢してろ……っ」

「ちが、っああ♡ わたひも、また、あ♡♡ うう、いつ、いきそ、うああ
……っ♡」

ずぬっ♡ ずぬっ♡ ぬぢゅぬぢゅぬぢゅっ♡

止まらない愛液でおまんこも太ももすっかりヌルヌルだ。少し苦しげに息を吐き出した先輩が自身を追い上げるようにピストンを早めてきた。ドキドキが止まらない。先輩が私で興奮してくれるのが、なぜだかずっと嬉しくて。

「は、……出る、……ッ」

「ん、ん……っ♡ せんぱい、だして、うあ、あ……っ？♡」

こくこく頷いて、手を伸ばしたのに。

先輩はずるんッ♡ と私の太ももからおちんぼを引き抜いて、びゅゅゅ♡♡ と、勢い良く自分の手の中に吐き出してしまった。

この間コンドーム越しに味わった奔流を直接見て、思わずぐくんと唾を飲み込む。

なんで抜いちやったんですか、とは……流石に言えない、けれど。

「……ふっ。すげー不満そう」

「うえ？ だ、だってえ……」

「スーツ汚れたらどうすんだよ」

「う……」

何も言い返せずに口ごもりつつ、おずおずと机から身を起こす。

大きな手のひらからも滴り落ちかけるそれをティッシュで拭った先輩は、そんなわたしの肩を抱き——ふ——と息を吐き出し、もう一度、押し倒してきた。

「はえっ？ な、なんで」

「イきそうつつつてたろ」

「えっ、えっ、い、言いましたけど……っうあ！？♡」

あつさりと足を割り開かれ、れろお……♡ と、おまんこにぬるついた感触が当たる。

初めての感触にぴいん♡ と足が突っ張る。クリトリスの回りを這っているのは、熱くて大きな、先輩の舌だった。

（あ、あ……♡ やばい、これ、絶対……きもち、よすぎるやつ……♡♡ どうしょ、絶対期待した顔しちやってる、恥ずかしい……♡）

「あー、クソかわいい……」

「ふあ……っ？♡ な、なにが、あ、っあ♡ あ……♡」
「お前がだよ」

ぬろろ……っ♡ れろろ♡ ちゅううう……っ♡
散々蹴られて膨らんだクリトリスを甘やかに吸われて、腰がかくかく揺れるのを止められない。

脳内で先輩の言葉を反芻して、いよいよ脳の一番奥までとろけそうだった。

「あ、あっ♡ んっ♡ ううつ、グー……っ♡ せ、せんぱい……これだめ、すぐいっひやうう……♡」
「ん、いいよ。いくまで舐めてる」

ちゅっ♡　ちゅう♡　れろれろれろ……♡

寄る辺なく伸ばした腕を捕まえられて、恋人みたいに繋がれながらクリトリスを吸われてまた、とぷん♡　と愛液が漏れてしまう。

さつきまであんなに激しく揺さぶられたのに、急に言葉も仕草も甘ったるくてずるい。

こんなの敵うわけがない。

（あ♡　あ♡　クリ、きもちい♡　おっきい舌で包まれるみたいにぬるぬる舐められるのダメ♡　先輩の手も、あったかくておっきくて、ぎゅってつかまってる……ぞくぞく止まんない♡　ううだめ、おっきい波、きちやう……っ♡）

「ふっ♡　ふうっ♡　んううっ♡　ああらめ、せんぱい、いく……っ
あ♡　イツ、ううぐ………っ♡♡」

びくんっ……!!♡
びく、びくんっ♡　かくかくっ♡　カクカクカク……♡♡

恥ずかしいほど小刻みに腰が揺れる。何度もおまんこの割れ目が収縮して、とぷとぷっ♡と愛液が溢れてしまった。

先輩がそれを蜂蜜みたいになれる♡と舐めるのがまた恥ずかしいのに、甘い余韻にやめてと言うこともできない。

——きもち、よかったあ……♡

「……意識飛んだか？」

「ふあ……っあ？ あ、えっと……だいじょうぶです、んむっ」

ウェットティッシュで口元を拭いている先輩に顔を覗き込まれて慌てて返事をしたら、柔らかいキスが落ちてきた。

嬉しい。嬉しいけれど、多分これはもうおしまい of キスだなあ、と思つてさみしい気持ちにもなる。

緩やかに唇が離れていつて名残惜しさに瞬きをする、色素の薄い瞳がまっすぐにこちらを射抜いてきて心臓が大きく跳ねた。

何か言おうとしているのだろう、ゆっくりと口が開く——けれど。

「くくくあつ、あつ、赤城先輩……!!」

「なんだよ」

「三浦……お、お手洗い、行きたくなっちゃいました……っ!!」

甘ったるい触れ方をされたからだろうか。

どうにもドキドキしすぎて、居ても立っても居られない気持ちになつてしまった。

先輩は目を見開いてから、はー………というとびきり大きいため息を漏らして、それでも乱れたシャツを整えて「行つてこい」と言ってくれた。

「……はあ、だめだあ。先輩といると、緊張収まりそうにないよお……」

逃げるように駆け込んだ女子トイレで手を洗いながらしよんぼりとする。先輩が私で興奮してくれるのは確かで、それは嬉しいけれども、結局のところ迷惑をかけてしまっているのは変わらない気がする。

（かわいいとか、エロいとか……そういう風に言ってくれるの嬉しすぎて、

本気にしちゃいそう……あれ？　でもさつき……迷惑じゃない、って、言つてたっけ）

別に迷惑じゃない、飯も食わしてやろうか——と、そう言われたことを思い出す。

それつてもしかして……と、ほんの少し心が沸き立った時。背後から刺すような声が飛んできた。

「この後も赤城さんと一緒なんですか？　三浦さん」

振り向いた先には、豊かな巻き髪を揺らした女の人が立っていた。

——この人は。

さつき肩にぶつかってきた人。資料室で、私と赤城先輩のことを部長に抗議していた人。

営業部の女性社員トップ——鍋木さんだ。